



任せて不満を言う人ではなく、引き受けて責任をとる人に ～困難な状況だからこそロールモデルとなれる教員を目指して欲しい～ 専攻長 中野博之

新型コロナ禍で始まり、新型コロナ禍で終わってしまった2020年に引き続き、2021年も新型コロナ禍が始まってしまいました。前例踏襲が通じない困難な状況において、人任せにして文句や不満ばかり言っている人が一定数存在する一方で、何が正解か分からない中、一長一短である選択肢から対策を選び判断することを引き受け、その判断結果の責任をとることを厭わない人もいました。こうした「引き受けて責任をとる人」の存在の有り難さを新型コロナ禍では実感すると共に自律した人間はかくあるべきと思わされもしました。



前例踏襲が通じない時に「引き受けて責任をとる人」であるためには、日頃から幅広い知識獲得に向けた努力をすると共にその知識を繋ぎ活用範囲の広いものにする思考力が必要となります。そして、広い視野に立ち物事に優先順位を付けた上で論理を構築する能力を常に磨いておく必要もあります。さらに、自分ではなく人の立場に立った上で「何のためにそうするのか」という理念につながる問いを問い続けていく姿勢と共に、自身が下した判断を説明し他者を説得する能力も求められます。正に、新しい学習指導要領が目指す資質・能力が新型コロナ禍では求められていたと思います。

困難な状況のお陰で、私たちは教師としてのロールモデルがどのような人であるのかを知ることができたと思います。ロールモデルとは具体的な行動の規範となる人のことを意味し、後輩教師にとって「将来こうなりたい」と目標にする先輩教師のことと言えます。上述の様な「引き受けて責任をとる人」は正にロールモデルとなる教師ではないでしょうか。困難な状況の中で、子どもの前で教師として、同僚教師の前で学校という組織の一員として、その立ち振る舞いによって多くの人を感動させた教師がいたことでしょう。

大ヒットしている映画「鬼滅の刃」では、未熟な主人公炭治郎が任務を引き受けて責任をとる先輩煉獄千寿郎の姿を目の当たりにして以下のような言葉を涙ながらに発します。

「悔しいなあ、何か一つできるようになっても、またすぐ、目の前に分厚い壁があるんだ。

凄い人はもっとずっと先の所で戦っているのに、俺はまだ、そこには行けない。

こんな所でつまづいているような俺は、煉獄さんみたいになれるのかなあ。」

戦いの映画と教師の仕事を一緒にすることに御意見があるとは思いますが、教職大学院の現職教員院生には後輩や教師を目指す人に上述の様に思われる「引き受けて責任をとる」教師であってほしいと願っています。そして、教職大学院の学部卒院生は自分のロールモデルとなる先輩教師を目指して日々努力し、将来、後輩教師にロールモデルとして目指される「引き受けて責任をとる」教師になってほしいと願っています。

明日はきっといい日になると信じて！

退職にあたって ～自分らしく～

副専攻長・総務部会長 瀧本 壽史

平成28年、弘前大学教職大学院設置前年の準備室の時から5年間お世話になりました。着任当時、教職大学院の方向性は「それなり」に定まっていたような気がしますが、いざ「それなり」の軌道に乗せていくには、一つ一つ「あやふや」な点を明確にしていく必要がありました。また、教職大学院の基盤を強固にするために



新たな組織を作ったり、その運用のための規定や申し合わせを作成する必要がありました。他の関係組織との連携・すりあわせも必要でした。組織の立ち上げにおいては当たり前の話なのですが、その前提には教職員の共通認識が必要になります。会議が繰り返されました。さらにこの時期は新たな企画は提唱されても成果・結果が見えてこないことから、ビルドの連続になります。振り返るとこの5年間のキーワードは「必要」だったような気がします。

そんな厳しい5年間でしたが、「それなり」で「あやふや」ながらも、同僚や院生とともに日々悪戦苦闘してきたことで、弘前大学教職大学院「らしさ」が見えてきたのではないかと考えています。これからはその「らしさ」に磨きをかける時期かと思えます。ただし、磨きすぎると「らしさ」が失われることもあります。楽しみです。

さて、私もようやく永年思い描いてきた「自分らしさ」に向かえる条件が整いました。この5年間で得られたたくさんさんの貴重な経験と思いを糧に、より自分らしく進んでいきたいと考えております。ありがとうございました。

退職にあたって ～文化の違いに戸惑った日々～ 入試フォローアップ部会 古川 郁生



今思い起こせば「小・中学校との文化の違い」に戸惑った毎日でした。私はこれまで中学校教員や教育行政に携わる日々を送り、無事定年退職を迎えてから、教職大学院に再度勤務したのですが、それまでの私の日常とは雲泥の差がありました。「アドミッションポリシー？」「シラバス？」……などなど。これまで私の世界では使われてこなかった言葉が当然のように飛び交う毎日で、まるで東京都知事の池田百合子さんと会話をしている気分でした。大学では当然のように使われる言葉が全く理解出来なくて、毎日脳みその中が「???」の状態

で、4年たった今でもたまに「???」の世界に浸ることがあるのですが、さすが恥ずかしくて、聞くに聞けずパソコンを使って意味を調べ、言われた言葉を理解し、仕事を進めるといったことがあります。

しかし、院生との授業においては、やはり私は教師だったのを実感出来る瞬間でした。共に学び、共に調べ、TTの先生の資料から新たな学びを知り、自分の知っていることを伝えることの楽しさは何事にも勝る時間で、公立中学校を60歳で定年退職してから、真の教育のあり方をもう一度見つめ直すことが出来ました。今ならもう少しきちんとした学校経営が出来るのではないかと考えています。このような機会を私に与えてくださった戸塚学前教育学研究所長、福島裕敏現教育学研究所長、教職大学院の先生方、今までお世話になった教育学部の先生方、そして院生の皆さんには感謝しても感謝しきれない思いでいっぱいです。本当に楽しく充実した時間を与えてくださりありがとうございました。

教育実践研究発表会を2月12日（金）に開催

一年次院生の年次報告会、二年次院生の最終報告会が2月12日（金）10:00から青森県総合学校教育センターで開催されます。院生は今、自分の研究の最後の追い込みに精一杯努力しています。この努力はきっと大きな花となり、立派な果実を実らせてくれるものと確信しております。

院生の頑張りを皆様もぜひご覧いただければ幸いです。事前申し込みの受付は既に終了いたしました。当日直接会場に来て参加されても構いません。なお、新型コロナウイルスの関係上、当日発熱があったり、咳等の症状がある方は入場をお断りさせていただくことをご了承ください。また、急遽オンラインでの実施になる可能性もあります。その時は改めて教職大学院のホームページ「新着情報」でご連絡いたしますので、そちらをご確認ください。皆様のご参加を心よりお待ちしておりますとともに、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。



昨年度の報告会の様子

1年次院生からのメッセージ 年次報告会に向けて

M1 特別支援教育実践コース 笹原 佳華



研究テーマ

他者とかかわり、主体的に活動に取り組むことを目指した授業づくり

私は、集中実習での「遊びの指導」で挙げられた

課題をもとに、児童が思いを適切に表現できるようになることや、教師からの働きかけを受け入れて課題に向き合えるようになることをねらい、自立活動の授業づくりに取り組んでいます。児童が他者とかかわり、主体的に活動に取り組めるよう、興味・関心をもてるような活動の設定、教材・教具等の工夫、教師の適切なかかわり等について検討しています。

自立活動の授業分析から、①自分で課題の順序を決める、②できる活動を取り入れる、③身近な人に認められる状況を設定する等の工夫により、学習意欲を引き出し、効果的な学習につながるという仮説を立てました。これらを踏まえた授業により、成功体験や、児童同士や教師との相互交渉が増えることにつなげていきたいと考えています。

M1 学校教育実践コース 佐藤 絢音



研究テーマ

インクルーシブ教育システムを意識した授業の在り方についての一考察
— 十分な教育となるようUDLを用いた授業を通して—

を通して—

私は通常の学級で発達障害の可能性のある児童生徒が、一定数在籍していることから、全ての児童が「分かった・できた」といった実感・達成感を持つ授業の在り方について報告書を書き進めました。その中でも特に、障害の有無に関わらず全ての学習者にとって、効果的でインクルーシブな学習のデザインを目指している「UDL（学びのユニバーサルデザイン）」を用いた授業について、これまでの授業実践の分析や仮説の設定等をし、考察をしました。報告会では、授業実践を基に分析し、次時の授業をUDLの視点が見えるように新しい学習指導案の型を作成したものも報告をします。UDLの活用によって児童の学ぶ意識がどのように変化し、学びのエキスパートへと成長していくと考えるかを意識して見て頂けると幸いです。

M1 学校教育実践コース 鳥山 純大



研究テーマ

道徳的な主体への変容を目的とした「考え、議論する道徳」研究

— ガート・ビースタの「中断」の教育と授業実践の往還—

実践の往還—

私の研究は、子どもの道徳性に関する主体への変容を目指し、「考え、議論する道徳」を通じた授業づくりと、その効果検証を目的としています。現在の学習指導要領においては「よりよく生きる基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習」が求められています。そこで、こうした主体的な生き方について、教育学的な理論と授業実践の往還を図っていこうと考えています。今後は、これまでに得た研究成果を整理しながら、次年度における実習に向け、理論と実践の往還をより進めていこうと思います。

M1 教科領域実践コース 澤田 有里



研究テーマ

高等学校体育における主体的・対話的で深い学びに関する一考察

— 生徒の思考活動を取り入れた授業実践を通して—

を通して—

私は、体育における主体的・対話的で深い学びの実現を目指して研究を進めています。今年度は高校1年生を対象に、バスケットボールで実践を行いました。毎回の授業のねらいを明確にし、ゲームの前後にグループごとの話し合い活動や振り返りシートによる言語活動を取り入れながら、生徒主体の活動を重視しました。研究を進めるに当たって、苦悩や困難もありましたが、ゼミの先生や実習校の先生方、周りの方々の温かい支援もあり、なんとか年次報告会を迎えることができそうです。年次報告会では、研究の成果を十分に伝えられるように、精一杯頑張りたいと思います。



M1ミドルリーダー養成コース 阿部 哲人



研究テーマ
生徒が主体的に健康な生活を送るための健康教育の在り方
—全校体制で取り組む体力・健康づくりを通して—

して—

本年度は勤務校における新体力テストの結果分析及び教員に対する学校課題に関する意識調査の結果を基にして、主題：『生徒が主体的に健康な生活を送るための健康教育の在り方』、副題：「—全校体制で取り組む体力・健康づくりを通して—」とし、本研究を進めることとした。来年度の具体的な実践内容は、保健体育科の授業の充実、一日の教育活動の中で体力づくりの場を設定し、運動量の確保をする。また、毎月1回、健康教育をテーマにした全校集会を実施し、健康への意識を高める。その他、健康に対して生徒が主体的に考え、計画するための話し合い活動、養護教諭等と連携した保健だよりの作成、保護者集会等での家庭への働きかけ、定時的・随時の二者面談等を通じた心の健康の充実、各教科における教科横断的な学習（連携型）の充実等を通して、課題解決に取り組むたいと考えている。



M1ミドルリーダー養成コース 木村 忍



研究テーマ
確かな「数学的な見方・考え方」の育成を目指した取り組みについて
—授業改善の視点を持ち続けるために—

教職大学院での学びを通して、私は授業改善の必要性を痛感するようになりました。高校では令和4年度から新学習指導要領が実施されること、独立行政法人教職員支援機構（NITS）による学校組織マネジメント指導者養成研修を受講して同僚性向上の必要性を感じたこと、文献講読により授業研究の在り方を再認識させられたことなどが要因です。これまで自分の授業は主観的にしか評価していませんでしたが、やはり客観的に評価してもらうことが大切であり、その

ためには授業研究の充実が欠かせません。また、授業研究をやり多いものにするためには同僚性の向上も必要です。来年度の実践研究は、理論と実践の往還・融合に努めて頑張りたいと考えています。

M1ミドルリーダー養成コース 齋藤 朗



研究テーマ
「組織としての学校の力」を高めるための校内研修の在り方
—対話型校内研修の実践をとおして—

今回は学校を「組織」として見ることに重点を置きました。日々の教員生活を送っていると、学校組織の一員であることは自覚していても「組織の在り方」について考えることはありません。教員はそれぞれ「よい学校」のイメージを持っています。「よい学校（組織）」と思える要因は何なのか。私は偶然の巡り合わせで「よい学校」ができあがるのではなく、教職員がイメージを共有して「学習する組織」を作り上げていくことが大切だと考えます。学校という職場を「この学校で働きたい」と思える「組織」に成長させるために、ミドルリーダーとしてどう貢献すればよいか。そのような悩みを思いに込め、今回の報告会では発表したいと思えます。

M1ミドルリーダー養成コース 佐藤 雄大



研究テーマ
逆向き設計による農業科の授業づくり
—高等学校 農業科 果樹単元「果樹の栽培と管理・評価（リンゴ）」—

年次報告会では「逆向き設計による農業科の授業づくり」というテーマで発表します。私は教職大学院で、ウィギンズとマクタイが提唱する「逆向き設計」論に出会いました。この授業設計論は、教育によってもたらされる結果から遡り教育設計をすることから逆向きと表現されます。

勤務校の生徒たちの課題は新学習指導要領に示される「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力など」の向上が挙げられます。そこで私は、生徒が授業で単元学習のゴールをあらかじめ見据えて課題に取り組み、農業科の強みである実習を座学と連動させることで、仲間と対話したり思考・判断したりする経験を積むことが有効であると考え、本研究に取り組むことにしました。

M1ミドルリーダー養成コース 澤田 夕香子



研究テーマ
地域づくりに参画する態度を育む「ふるさと学習」
—総合的な学習の時間を中心に—

人口減少が加速している本県では、地域の振興や活性化を図る上で、それを担う次世代の人材育成が不可欠であり、子どもたちが社会の担い手として地域づくりに参画していく態度を育成することは極めて大切です。そのために、地域の産業・歴史・文化等を教材として学ぶ「ふるさと学習」に様々な角度から取り組むことが有効だと考えます。生徒が自分と地域社会とのつながりを自覚し、地域の課題を自分ごととして捉えて、その解決に向けて自らができることに主体的に取り組む態度を育成することをめざし、例年取り組んできた「ふるさと学習」をさらに充実させたいと考えました。

勤務校が小規模校であることをいかに、生徒個々を丁寧に観察しながら、ねらいに迫るような実践研究にできればよいと思っています。



M1ミドルリーダー養成コース 相馬 昌文



研究テーマ
望ましい行動を引き出す学習環境づくりと児童の規範意識の育成について
—PBISとSELの活用を中心に—

児童が望ましい人間関係を構築することによって、よりよい学校生活を送ることができるという理念のもと、学年全体を対象としたポジティブな行動介入と支援(PBIS)の実施及び社会性と情動の学習(SEL-8S)を授業で取り組むことで、適応行動の増加や学習環境の整備、社会性スキルの獲得による規範意識の向上が図られていくと考えます。また、児童がこれらのプログラムの実践をすることによってお互いを認め合い、よりよい人間関係の構築や自他を思いやって行動できる学級集団への成長が期待できると考えています。さまざまなアンケートや調査などお忙しいにもかかわらず実践研究に協力してくださった先生方に感謝して次年度も研究を進めていきたいと思っています。

M1ミドルリーダー養成コース 山本 隼人



研究テーマ
生徒の社会的能力を育み、学校適応感を高めるための取組について
—SEL-8Sプログラムの実践と学校適応感尺度ア

セスの活用を通して—

「生徒たちによりよい学校生活を送ってほしい」という願い、そして「育成の必要性が高まっている“社会的能力”をどのように捉え指導していけばよいか」という問題意識のもと、このテーマを設定しました。社会的能力の育成は、生徒の学校生活や様々な活動を下支えし、適応を促進するための重要な取組であると考えています。育成したい能力を明確にし、既存の教育活動との関連を図りながら予防・開発的な指導・支援を行い、社会的能力の育成と学校適応感の向上につなげる指導の在り方について、実践的に検討していければと考えています。今年度、実践研究に向けてご指導・ご協力くださった教職大学院の先生方、そして勤務校の先生方に感謝しながら、次年度のよりよい実践につながる報告会にできればと考えています。



M1ミドルリーダー養成コース 六角 健太



研究テーマ
特別支援学校高等部における卒業後に体力の維持・向上に努めるための一考察
—朝の運動(体育)での

取り組みを通じて—

本研究は知的障害特別支援学校高等部に在籍する生徒の卒業後の生活においても、体力の維持・向上や健康の保持増進をテーマとしております。朝の運動(体育)を通して、生かすことができるようにするためにどのような取り組みが有効かということを検証することを目的としています。「卒業後の充実した生活が労働にも良い影響を与えるのではないか」という勤務校実習における調査結果を参考に、保健体育を中心とした学習において、「からだ」だけでなく「こころ」の面からも、体力の向上や健康についてのアプローチ方法を検証していきます。

2年次ストレートマスター院生 からのメッセージ 「2年間の学びを通して」

ここからは、2年次ストレートマスターの院生の2年間の学びや今後の決意の原稿を掲載いたします。

なお、この11名の院生のうち、来年度10名が教諭として内定し、1名が公務員として内定しており全員の就職先が決定しております。

M2教育実践開発コース 一戸 萌里



学び続ける教員

駆け抜けた大学院での日々を思い返すと、山あり谷あり、常にその連続でした。新しいことが分かったり、できるよう

なったつもりでも、その先にはまだまだ知らないことがたくさんありました。自分自身の壁にぶつかることもありましたが、乗り越えた先には、自己の成長や子どもたちの成果を、僅かながらに感じることが

できました。来年度からは、教壇に立つこととなります。困難にぶち当たっても、前向きに、最後まで諦めない



姿勢で、子どもたちとともに成長していくことができる教員になります。これまで、私に御指導くださった先生方、本当にありがとうございました。

M2教育実践開発コース 金田 宏樹



臨時講師での勤務を経て、なんとか地元で高校地理教員として採用になるべく教職大学院でできることを全力で取り組んできました。

残念ながら結果には結びつきませんでしたが、お世話になった先生方や共に学んだ仲間達という繋がりをつくることができました。また、改めて学生という立場になることで見えたことがたくさん

ありました。

実はスーツより作業服やヤッケを着ることの方が多かった私ですが、いろんな世界を見ることができた2年間でした。4月からは、かねてより合格しておりました北海道にて採用となります。教職大学院での学びをこの時点で正解と言うには早計だと思うので、「正解にする」ためにこれからも努力し続けていきたいと思えます。



M2教育実践開発コース 古川 弘基

入学してから、あっという間に2年が過ぎ去ろうとしています。大学院で過ごしたこの2年間は、

風間浦の冷水で身が引き締まったアンコウのような2年間でした。将来の自分にとって、不要な部分が一つもない、そんな充実した日々を送ることができました。風間浦のアンコウが有名だと知ったのも、大学院の「あおもりの教育」という講義を受講したおかげです。平川市に生まれ、時には都会にあこがれた私ですが、今では青森県に誇りを感じています。青森県のもつ豊かさを生かして、子供たちと向き合っておりま。そして、教壇に立つてから、どこかの休日にアンコウ鍋をつつきながら、この2年間の振り返りたいと思えます。先生方、院生の皆さん大変お世話になりました。ありがとうございました。

M2教育実践開発コース 佐藤 皓一



私が弘前大学教職大学院の2年間で学んだことは、大きく分けて2つあります。1つ目は子どものとらえ方です。子ども一人一人に違う特性や個性があり、教員はそれらを把握しながら接することが求められます。このことについてストレートマスターの同級生やミドルリーダーの先生方と考え、意見を交換することで子どもの見取り方を深めることができました。

2つ目は、授業です。実習校に多くの授業実践をさせていただき、その中で分かりやすく伝える言い方や、納得させ



るまでの過程など様々なことを学ぶことができました。これは授業だけでなく、人との付き合い方や接し方にも生きてくると思います。

これらのことを心に刻みながら自分らしく社会人として他の人のために精一杯働いていきたいと思っています。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

M2教育実践開発コース 須藤大貴



教職大学院での2年間では、授業や実習などを通して多くの学びを得ることができたと思います。同時に様々な人との繋がりを築ききっかけにもなり、教員を含めた様々な立場からの視点や考え方に触れることができたことは、自分自身の貴重な経験になったと感じています。

4月から青森県内の小学校の一教員として勤めていくこととなりますが、最初の1年は特に困難が多いことは覚悟しています。その上で、目の前の子供とどう向き合っていくか、また、今の自分に何ができるかという思いを強く持ち、これまでの学びや繋がりを少しでも生かしていきたいと思っています。そして、常に新たな学びを得ながら、子どもたちとともに成長していきたいです。

M2教育実践開発コース 蛸嶋亮介



教職大学院での学びを振り返ると、自身が掲げた研究方針にフィールド実習から得られた気づきや学びを関連付けて一つの結果を導く2年間は、

一本の木を育てるようなものであったと感じています。「これが分かりません。」と直接尋ねてくる生徒、言葉ではなく態度や振る舞いで何かを訴える生徒、「そういうことか!」と言うや否やペンを素早く走らせる生徒、できたことの安堵から思わず顔が綻ぶ生徒、一人でも多くの生徒にもっと「できた!」を体験させたいという気持ちは授業研究の原動力となりました。

来年度からは実際に英語教師として教壇に立つこととなります。今後は教職大学院で得た学



びを土台とし、それを更に大きな木に育てていきたいと思っています。2年間、本当にありがとうございました。

M2教育実践開発コース 谷垣花



2年間の教職大学院での学びを通して、自身が目指す養護教諭像がより明確になったと感じています。講義やフィールド実習等を通して、学校において子どもを取り巻く様々な立場、視点からの考えに触れ、子どもを「みる」ための要点について多くの気づきを得ました。さらに、フィールド実習での自身の保健室対応について、指導教員や同じゼミ生とともに行った省察は、養護実践への学びを深めるだけでなく、自分自身を客観的に見つめる意義深い機会となりました。

今後はこれまでの学びを糧に、一養護教諭として青森県の教育に貢献できるよう、より一層努力していきます。



M2教育実践開発コース 成田伊織



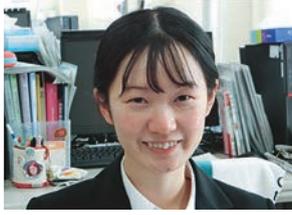
教職大学院に在籍した2年間の講義や観察実習で様々なことを学びましたが、私にとってはフィールド実習での学びが非常に大きかったと思います。

生徒に合わせた授業作りの大切さや、他の先生方と積極的にコミュニケーションを取ることが非常に重要であることを知ることができ、貴重な経験となりました。実習校の先生方や大学院の先生方には大変お世話になりました。2年間の学びを生かし、4月から千葉県の教員として頑張っていきたいと思っています。



M2教育実践開発コース

藤澤麻衣子



私は2年間の院生活を通して、「生徒の主体性に働きかける個別の保健指導」を考え続けてきました。そこで学んだのは、生徒理解に

基づき、個に応じて柔軟な対応を創造していくことの大切さです。院生や教授と、生徒理解や対応のあり方について模索する過程を繰り返したことで、教員としての視野が広がり、理解や対応の幅も広がったように感じます。また、理論を踏まえながらも、その理論に縛られることなく、目の前の生徒をありのまま受け入れ、その子に合った対応を創造していくことの大切さにも気付くことができました。

来年度からは、養護教諭として生徒の笑顔を支え、それを増やしていくことができるよう、教職大学院での学びと自分らしさを大切にしていきたいと思えます。



M2教育実践開発コース

山田啓明



教職大学院では様々な人との出会いがあり、学びがありました。教職大学院に入った当初は、自分に自信がなく、無理に背伸びしようとしすぎていたように思います。しかし、一年次に学部卒院生やミドルリーダー養成コースの先生方と共に講義を受け、語る中で、自分の持つ強みや、目指す教師像が見えてきたような気がしています。もちろん、至らない点もまだまだありますが、教職大学院で見つけた自分の強みをもっともっと伸ばしつつ、成長していきたいです。

新型コロナ禍が流行し、ソーシャルディスタンスが叫ばれる中ではありますが、教職大学院で得られた仲間との“密”なつながりを大切に、これからも頑張りたいと思えます。



M2教育実践開発コース

米田雄人



私は、2年間の協働的な学びにより、「俯瞰力」がついたと感じています。教職大学院での院生同士の省察により、様々な視点から事象を捉える

意識が強くなりました。また、社会状況に関する学習も深められたことで、より広い視点で、子どもたちを捉えられるようになりました。その俯瞰力を生かして、4月からは小学校教師として青森県の子どもたちと向き合っていく決意を持ちました。

最後に、2年間における最大の成果を述べます。それは、青森県でご活躍される教授や院生の皆様とのつながりができたことです。校種・年齢をこえた、複雑な学習集団で協働する過程を通して、一人の人間として大きく、深く、成長できました。このつながりを力にし、子どもたちと自身のために、今後も学び続けていく所存です。

2月20日(土)、2月21日(日)に院生企画の研修会が実施されます

2月20日(土) 13:30~15:30にM1ミドルリーダー院生企画による「双方向でつながろう！オンラインの授業を体験してみませんか」、そして2月21日(日) 13:00~16:30にM1、M2ストレートマスター院生による「特別支援教育の視点を踏まえた授業デザイン研修会」と題して院生が主体となって企画する研修会が実施されます。

詳しくは、弘前大学教職大学院ホームページの「新着情報」をご覧ください。興味・関心がある方は申込書にご記入いただき参加してみませんか。きっと皆さまのお役に立つ研修会となるはずです。

〈編集・発行〉

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻
(教職大学院) News Letter 第12号 2021.2.3発行
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
Tel 0172-36-2111(代表)
メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp
HP 弘前大学教育学部(教職大学院をクリック)
弘前大学教職大学院 入試フォローアップ部会